様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(A)
研究期間：2010～2014
課題番号：２２２５２００１

研究課題名（和文）科学および地域の史的観点に立つイスラム問題の比較分析－中東と東南・中央アジア－

研究課題名（英文）Comparative and Genealogical Analysis of Islamic Issues Focusing on Scientific and Regional Aspects

研究代表者
北村　歳治（Kitamura, Toshiharu）

早稲田大学・アジア太平洋研究科・名誉教授

研究者番号：００３２９１５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　29,100,000円

研究成果の概要（和文）：本調査研究は、歴史的系譜と地域的特性を念頭に置き、科学技術と東南アジア･中東等に焦点を当て今日的な視点で取り組んできた。
具体的には、イスラーム諸地域の研究者等と直接的に連携し、天文･陶器･医薬･建築等の分野で斬新な調査活動を進め、非イスラームとの相互交流から生まれ出た歴史的なイスラーム文化の保存･育成の研究に成果をもたらした。他方、ICT利用･医療サービス･金融等の今日的な課題に取り組むイスラーム諸地域の動きに関する調査分析も行なった。これらの成果は、早稲田大学、インドネシア国立イスラーム大学等で行われた計６回のシンポジウム等で今日のイスラーム問題の躍動する建設的な側面を明らかにできた。

研究成果の概要（英文）：This project undertook a comparative and genealogical approach to modern Islamic scientific/technological and regional socio/economic issues, focusing on Southeast Asia, Middle East, Central Asia and other related areas.
Based on well-coordinated preparatory arrangements with local scholars and researchers, each Japanese team performed innovative research activities in the fields of classical astronomy, ceramics, pharmaceutics, and architecture in the most updated analytical context, resulting in the promotion studies of Islamic cultural preservation activities. Those contemporary socio/economic issues, confronted by modern Islamic societies and economies, were also grappled sometimes from critical viewpoints, producing most updated analyses of ICT application, social medical services and Islamic finance. A series of six symposia brouht to the fore vivid developments of constructive Islamic developments which will contribute to the benefits for both Islamic and non-Islamic societies.

研究分野：経済学（国際経済、金融経済、移行経済、会計監査論）

キーワード：イスラーム科学　系譜分析　地域比較　イスラーム天文学　イスラーム陶器　イスラーム建築　医療と医薬　イスラーム金融

１．研究開始当初の背景

本研究は、先行した 2 つの科研費基盤研究（A）（「IT 等の科学技術を踏まえたイスラム問題の現状と今後の展開に関する研究」（2003~2005 年度、課題番号 15252001）及び「先端的な科学技術を視点としたイスラム問題の系譜的かつ広域的な研究と将来の展望」（2006~2009 年度、課題番号 18252002）の研究蓄積と人的ネットワークをベースに活動を展開した（いずれも、代表は北村歳治）。これらの２研究では、農業、窯業等の分野に加え、イスラーム金融の系譜等、現代につながる流れとともに、情報通信技術（ICT）時代のイスラームの社会問題の把握に努めた。2010 年度に出発した今次の調査研究は、現地での研究者等との接触を深め、系譜分析を精緻化し、地域問題を批判的に取り扱うとともに、日本との係わりを織り込むことを考慮した。

今次の調査研究は、3 年で細部の調査分析を進め、最終年に全体的な取りまとめを行なうこととした。

２．研究の目的

欧米等の先進的な現代社会と先鋭的に対立すると見なされがちなイスラームを、新たな視点（伝統的な宗教、思想、民族等の視点から離れた視点）から分析する。即ち、科学技術による同質化と地域の発展に伴う多様化として捉え、今日の科学技術を異文化間の生成-交流-進化-伝播の過程を念頭にその進展を捉える（系譜研究）。同時に、社会的な受容の過程でそれぞれのイスラーム地域の特性がどのように多様化に影響したかを探りその比較を行なう（地域比較研究）。これらを通じて現代イスラームへの理解を深めるとともに、次世代を展望に入れた国際協調に貢献することを目的とする。

３．研究の方法

イスラームは科学技術と無縁に近いものとして映っている。しかし、系譜研究は、7 世紀以降のイスラーム世界がそれ以前の中近東やグレコ・ローマン等の科学技術を摂取しそれの改良を加え、その後 13 世紀には高度の普遍性を持つものとなったこと、それが欧州に伝播していったいことに着目し、対象分野を天文学、陶器、建築、医薬・医療、金融等に広げ、調査研究の深化を図る。

また、イスラームの生活文化は、特異なものとして映りがちだが、地域比較研究では、市場経済や情報伝達のメカニズム等を、それぞれの地域の受容・反応様式の相違という形で捉える。特に、イスラーム・非イスラームに係りなく普及した今日の ICT の利用の実情を把握し、現代のイスラーム問題の特徴を探るとともに、これを教育、医療等の分野にも適用してみる。

上記の 2 つの視点に立つ調査研究は、いずれも現地での調査研究をベースに、最新的な動向を踏まえることとし、最終年度には全体的な観点からの取りまとめを行なう。

４．研究成果

今次の研究成果は、これまでと同様、研究者相互での研究会のみならず、幅広い関係者との間でシンポジウム等を通ずる対外発信と意見交換に重点を置いた。研究成果とシンポジウムの内容の記録は、早稲田大学の『イスラム科学研究』第 7~10 号に集約した他、その他の研究誌等にも一部記載している。以下では、研究成果を、(1) 系譜研究、(2) 地域比較研究に分け、次いで、本研究が重視した(3) シンポジウムの展開、そして最後に、(4) 残された課題について触れる。

(1) 系譜研究では、イスラームの天文学・陶器・建築について地道な調査研究を重ねたが、同時に、今日との接点という意味で文化財保全の観点を常に取り入れた。逆に、イスラーム金融については、大局的な見地から、今日の調査研究の流れを捉えることに努めた。また、医薬･医療、及び、教育関係については、事例研究を基にした成果を挙げている。

① イスラーム天文学については、その形成と発展（2013 年）、コペルニクスに与えた影響（2014 年）の研究成果が得られた。

② イスラーム陶器については、初期イスラームから近世にかけての窯業技術の実証分析を中心に、ラスター彩陶器の研究（2011 年）、ベナキ博物館所蔵のラスター彩陶器の分析（2012 年）、コプト博物館所蔵陶器の分析（2013 年）を基に、イスラーム陶器の成立と展開の分析し（2013 年及び 2014 年）、同時に、文化財保存という今日的な課題に取り組んだ。イスラーム建築については、美の追求の過程を追うとともに、生活空間という今日的な感覚で成果をまとめている。

③ イスラーム金融は、国際的な金融危機の影響を踏まえ、IMF･世界銀行との意見交換を通じてイスラーム金融の調査研究が既に個別大学及び民間部門にシフトしていることを確認（2013 年 9 月）するとともに、オックスフォード大学関係者との意見交換（同 11 月）を通じて新たな取組み体制の必要性を看取したことを日本関係者に伝えた。

④ 医薬･医療関係では、医薬におけるミイラの東西史の分析（2010 年）、解毒剤の東西交流史の分析（2012 年）に加え、(下記の地域比較研究を兼ねて)インドネシアにおける医療サービスの事例研究（2012 年）の成果が得られた。

⑤ 教育問題については、イランのパヤーメ・ヌール大学における通信教育に係る教育問題の報告（2010 年）に加え、マレーシアの学生の価値意識に事例分析（2012 年）、インドネシアにおける国立イスラーム大学における ICT 教育問題等の分析（2012 年及び 2013 年）が行なわれた。

(2) 地域比較研究においては、各地のイスラームの分類（東南アジア、中東、及び、中央アジア）と比較を念頭に、ICT の影響等を含め、今日のイスラーム問題を地域的な特徴と経路を中心に分析が行なわれた。特に東アジアについては、イスラーム化について鳥瞰的な研究成果を得ることができた。また、混迷するイスラーム地域社会の分析においては、ICT に依存するメディアの影響を分析し、中東と東南アジアの分析に成果を得ている。さらに、本研究のまとめの一環として日本人思想家とイスラームとの係りの問題も取り上げた。

① 東南アジアの非イスラーム地域におけるイスラームの分析(2011 年及び 2012 年)に引き続き、中国におけるイスラーム化の分析（2013 年）を進めた。また、ICT の利用によるマレーシア・インドネシア社会への影響分析の成果が得られた（2013 年）。

② 中東イスラームについては、「アラブの春」の分析、及び、サラフィー主義の拡大の分析が行なわれた（2012 年）。特に、ICT の影響について、「アラブの春」が始まったチュニジアにおけるメディア問題の分析（2011 年）及びイスラミック・ステートの ICT 利用問題の事例分析（2014 年）の成果が得られた。さらに、エジプトに焦点を当て、開発と文化遺産保存の相克の調査分析（2011 年）が行なわれた。これは、エジプトに限らずイスラーム世界の建築と保存問題にも関連している（2013 年及び 2014 年）。

③ 中央アジア・イスラームについては、EBRD（欧州復興開発銀行）の観点から、イスラーム地域に対する拡大的なアプローチの分析に加え、Mustafa Aktar ボアジチ大学教授の（中東とは異なる）近世トルコにおける科学観の進展の分析成果を得た(2010 年)。

④ 日本とのイスラームをめぐる関係については、滞日ムスリムに対する日本人意識（2010 年)、滞日ムスリムのモスク建設分析（2013 年）の研究成果が得られた。また、日本人思想家によるイスラーム問題の本格的な取組みがマレーシアやトルコに影響したという分析結果を明らかにした(2013 年)。

(3) 本研究の成果は以上の通りだが、副次的には、広汎な参加者を擁したシンポジウムでの対外発信と意見交換を通じて研究者自身が成長した点を指摘できる。これは、本研究が現代のイスラームの課題を念頭に、系譜及び地域比較のアプローチを採ったために、学際的な要素が多かったためと考えられる。

尤も、上記のシンポジウムはここ数年の国際社情勢に大きく影響された。2010 年の核問題をめぐる反欧米運動によるイラン情勢の不安定化、同年末にチュニジアで始まった「アラブの春」の影響を受けて 2011 年にはリビア、エジプト等の政治社会情勢の大きな混乱、さらに、2013 年 8 月に発生したエジプト・イスラーム政権の崩壊、トルコにおける反イスラーム政権デモ等により情勢が緊迫化した。当初計画していた中東におけるシンポジウムは、イラン、エジプト、トルコ等と計画を変更せざるを得なくなり、また、最後に計画した（イスラーム文化の西欧伝播に着目した）スペインでのシンポジウムも連絡体制の混乱、エボラ熱の噂により開催を断念した経緯がある。結局、シンポジウムは、インドネシアと東京における開催となった。

① 東京（早稲田大学）でのシンポジウムは､2010 年に事実上ワークショップとなり、海外からの参加者を中心に事例研究･調査報告が中心となった。

② 2011 年は、イランでの開催が不可能となったため東京で開催し、保坂修司日本エネルギー経済研究所中東研究センター研究理事によるチュニジアの「アラブの春」の背景となったネット情報の動向の詳細な分析報告が行なわれた。

③ 2012 年は、ジャカルタの国立イスラーム大学におけるシンポジウムにおいて Komaruddin Hidayat 学長の講演（ICT が社会・大学に与えた影響）を基に、インドネシアにおける教育･医療における ICT の応用問題の事例研究が取り上げられた。その直後の 2012 年 11 月には、早稲田大学において（以前から予定されていた）「アラブの春」後の中東の社会経済動向の報告と議論が行なわれた。

④ 全体的なとりまとめを兼ねた 2014 年 1 月と（年度繰越しによる）2015 年 1 月のシンポジウムは、中東、スペインでの開催が実現できず、いずれも早稲田大学で行なった。近代日本人のイスラーム世界観についてセルチェク･エセンベル ボアジチ大学名誉教授による講演とともに、系譜研究としてのイスラーム天文学（鈴木孝典東海大学清水教養教育センター教授)、陶器（長谷川奏早稲田大学総合研究機構客員教授、真道洋子早稲田大学イスラーム地域研究機構招聘研究員)、建築（深見奈緒子早稲田大学イスラーム地域研究機構招聘研究員)、及び、石油の東西史比較（保坂修司日本エネルギー経済研究所中東研究センター研究理事)、さらに、地域比較研究として混迷するイスラーム情勢と比較的安定的に見えるエジプトとインドネシアの批判的な比較（保坂修司理事、鈴木恵美早稲田大学イスラーム地域研究機構招聘研究員、見市建岩手県立大学准教授）による多彩な報告が行なわれた。

(4) 今後の課題としては、科研費を基盤とする本研究が今後の調査研究活動の懸け橋となりうる 3 点がある。

①系譜研究を含む地域比較研究のネットワークとして、イスラーム文化･科学･技術の欧州伝播チャネルについて（マグレブ・イスラームとイタリアの接点となった）シチリアのパレルモ大学の Franco Tamaselli 教授(中世･近世建築史）と今後の共同研究の可能性

を話し合ってきた経緯がある。
②中央アジア・イスラーム問題は、質・量ともにウズベキスタンに集中している。この観点から、タシケントのイスラミック大学の Ravshan Abudullayev 学長と今後の提携を話し合ってきた経緯がある。
③東南アジア・イスラームについては、タイを越えて東南アジア・イスラーム問題の建設的な対処という観点から Chaiwat Satha-Anand タマサート大学教授等と今後の共同研究の可能性を話し合ってきた。また、バンコクのトンブリ地域におけるイスラームの歴史的経緯についてバンコク国立博物館の Ms Barbara MacNeill 等と今後の共同研究の可能性を話し合ってきた。
上記の①～③を今後どのように活かしていくかが今後の課題となる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　38　件）
①長谷川奏：「初期イスラーム時代のファイユーム陶器―ベナキ博物館所蔵試料から―」、西アジア考古学（日本西アジア考古学会）、査読有、Vol.15、2014、 57-60
②北村歳治：「近年における金融分野の基調的な変化」、アジア太平洋討究（早稲田大学アジア太平洋研究センター）、査読無、第 23 号、2014、pp.7-57、http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/handle/2065/44144
③加納貞彦：「科学技術面からみたインドネシア」、アジア太平洋討究、査読無、第 23 号、2014、pp.59-78、http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/handle/2065/44146
④北村歳治：「英国とイスラム」、イスラム科学研究　（早稲田大学イスラム科学研究所）、査読無、Vol.10、2014、pp.1-17
⑤保坂修司：「石油の歴史―日本と中東」、イスラム科学研究、査読無、Vol.10、2014、pp.19-39
⑥長谷川奏：「巡礼壺、エジプト赤色スリップ（白色化粧土群）、ヌピア系彩文―コプト博物館所蔵資料から―」、イスラム科学研究、査読無、Vol.10、2014、pp.41-50
⑦セルチェク・エセンベル：「政治と文化の岐路―近代日本人のイスラーム世界観―」、イスラム科学研究、査読無、Vol.10、2014、pp.55-63
⑧鈴木孝典：「イスラーム天文学の形成と発展」、イスラム科学研究、査読無、Vol.10、2014、pp.65-70
⑨長谷川奏：「イスラーム陶器の成立と展開(1)」、イスラム科学研究、査読無、Vol.10、2014、pp.71-75
⑩岡野智彦：「イスラーム陶器の成立と展開(2)」、イスラム科学研究、査読無、Vol.10、2014、pp.77-81
⑪深見奈緒子：「イスラーム建築の美と生活空間の創出」、イスラム科学研究、査読無、Vol.10、2014、pp.83-92
⑫高橋謙三：「ICT 普及の観点からのマレーシアおよびインドネシアにおけるイスラーム社会の特質」、イスラム科学研究、査読無、Vol.10、2014、pp.93-100
⑬店田廣文：「滞日ムスリムによるモスク建設と情報発信」、イスラム科学研究、査読無、Vol.10、2014、pp.101-106
⑭北村歳治：「中国におけるイスラム化の特異性に関する考察」、アジア太平洋討究、査読無、第 21 号、2013、pp.51-86、http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/handle/2065/39824
⑮岡井宏文：「マレーシアにおける若者の価値意識と出生力」、イスラム科学研究、査読無、Vol.9、2013、pp. 39-53
⑯ Takahashi, Kenzo: “Advanced HRD in Asian Region: Overview of Scholarship System in Japan”、 イスラム科学研究、査読無、Vol.9、2013、pp.59-72
⑰Kano, Sadahiko: “Application of ICT to Health care”、イスラム科学研究、査読無、Vol.9、2013、pp. 73-84
⑱福田安志：「サラフィー主義の拡大とその経済政策」、イスラム科学研究、査読無、Vol.9、2013、pp. 89-102
⑲保坂修司：「バーザフルからヘイサラバサラへ―薬の東西交渉史―」、イスラム科学研究、査読無、Vol.9、2013、pp. 103-124
⑳樋口美作：「ジャカルタのイスラーム病院―イスラームと近代医療の一体性―」、イスラム科学研究、査読無、Vol.9、2013、pp. 125-128
㉑長谷川奏：「初期イスラーム時代の水壺」、イスラム科学研究、査読無、Vol.9、2013、pp.125-128
㉒岡野智彦：「白地藍彩双鳥文皿の来歴」、イスラム科学研究、査読無、Vol.9、2013、pp. 133-136
㉓北村歳治：「東南アジアの非イスラム地域におけるイスラム」、アジア太平洋討究、査読無、第 18 号、2012、pp.11-65 http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/handle/2065/36012
㉔高橋謙三：「ICT 開発とイスラム文化に関するインドネシアとマレーシアの比較論的研究」、イスラム科学研究、査読無、Vol.8、2012、pp. 25-46
㉕保坂修司：「ベンアリー最後の日々―アラブの春とメディア―」、イスラム科学研究、査読無、Vol.8、2012、pp. 49-66
㉖中澤賢治：「欧州復興開発銀行（EBRD）のモンゴル、トルコ、北アフリカおよび中東への地域的拡大について」、イスラム科学研究、査読無、Vol.8、2012、pp. 67-74
㉗Pyanova, Elena: “Cherkessia: Old Problems and New Challenges”、 イスラム

科学研究、査読無、Vol.8、2012、pp. 75-84
㉘Murashkin, Nikolay: “Japanese Foreign Policy in Central Asia”、 イスラム科学研究、査読無、Vol.8、2012、pp. 85-92
㉙長谷川奏：「都市開発と文化財保存の相克」、イスラム科学研究、査読無、Vol.8、2012、pp. 93-98
㉚岡野智彦：「ハーキム銘ラスター彩陶器」、イスラム科学研究、査読無、Vol.8、2012、pp. 99-102
㉛Hosaka, Shuji: “Socio-Economic History of Mummies”、 イスラム科学研究、査読有、Vol.7、2011、pp.31-40
㉜Javakhishvili, Nino: “Japanese Students Feel Closer to West Europeans and Americans, than to Asians”、イスラム科学研究、査読有、Vol.7、2011、pp.41-54
㉝Pyanova, Elena: “Experiencing the West: Observation by Kume Kunitake on the Status of Religion in Russia of 1873”、イスラム科学研究 査読有、Vol.7、2011、pp.55-64
㉞Aktar, Mustafa: “Development of Science as an Institution in Ottoman Empire and Turkish Republic”、 イスラム科学研究、査読有、Vol.7、2011、pp.65-76
㉟Cansu, Ulas Deniz: “The Effects of ICT on Tourism in Turkey and Japan”、 イスラム科学研究、査読有、Vol.7、2011、pp.77-120
㊱桜井啓子：「パヤーメ・ヌール大学：拡大するイランの通信教育とその問題点」、イスラム科学研究、査読有、Vol.7、2011、pp.121-130
㊲店田廣文：「滞日ムスリムおよびイスラームに対する日本人の意識調査」、イスラム科学研究、査読有、Vol.7、2011、pp.121-130
㊳岡野智彦：「イスファハーンの陶工 2010」、イスラム科学研究、査読有、Vol.7、2011、pp.135-138

〔学会発表〕（計 0 件）
〔図書〕（計 5 件）
①長谷川奏：彩流社、「地中海文明史の考古学：エジプト物質文化研究の試み」2014、176
②保坂修司：山川出版社、「サイバー・イスラーム―越境する公共圏―」、2014、127
③保坂修司：山川出版社、「イラク戦争と変貌する中東世界」、2012、98
④保坂修司：「オサマ・ビンラディンの生涯と聖戦」朝日新聞出版、2011、266
⑤長谷川奏、北村歳治：「エジプトにおける文化遺産の保存問題―史跡整備の動向とその背景―」、リサーチ・シリーズ No.4（早稲田大学アジア太平洋研究センター）ISSN 2185-131X)、2011、190、http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/handle/2065/33672

６．研究組織
(1)研究代表者
北村　歳治（KITAMURA、Toshiharu）
早稲田大学国際学術院（アジア太平洋研究科）名誉教授
研究者番号：00329153
(2)研究分担者
①佐藤　次高（SATO、Tsugitaka）
早稲田大学文学学術院教授（2011 年 4 月死去）（研究者番号：10012981）
②店田　廣文（TANADA, Hirobumi）
早稲田大学人間科学学術院教授
研究者番号：20197502
③近藤　二郎（KONDO, Jiro）
早稲田大学文学学術院教授
研究者番号：70186849
④桜井　啓子（SAKURAI, Keiko）
早稲田大学国際教養学術院教授
研究者番号：70235216
⑤高橋　謙三（TAKAHASHU, Kenzou）
電気通信大学国際交流センター教授
研究者番号：50377470
⑥長谷川　奏（HASEGAWA, So）
早稲田大学総合研究機構客員教授
研究者番号：80318831
⑦吉村　作治（YOSHIMURA, Sakuji）
早稲田大学国際学術院名誉教授
研究者番号：80201052
⑧山崎　芳男（YAMASAKI, Yoshio）
早稲田大学理工学術院名誉教授
研究者番号：50245263
⑨及川　靖広（OIKAWA, Yasuhiro）
早稲田大学理工学術院教授
研究者番号：70333135
⑩岡野　智彦（OKANO, Tomohiko）
前中近東文化センター主任研究員
研究者番号：40260145
⑪鴨川　明子（KAMOGAWA, Akiko）
山梨大学教育学研究科准教授
研究者番号：40386545
(3)連携研究者
①保坂　修司（HOSAKA, Shuji）
日本エネルギー経済研究所中東研究センター研究理事
研究者番号：80421220
(4)研究協力者
①加納　貞彦（KANO, Sadahiko）
早稲田大学国際学術院（アジア太平洋研究科）名誉教授
研究者番号：60318855
②深見　奈緒子（FUKAMI, Naoko）
早稲田大学イスラーム地域研究機構招聘研究員
研究者番号：70424223
③鈴木　孝典（Suzuki, Takanori）
東海大学清水教養教育センター教授
研究者番号：20226525